

## 分校の実践

# 「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」

## 1 はじめに

分校では、平成25年度から、「発達障害のある子どもの授業づくりと、そのための教材・教具の工夫を行う」という中期目標の実現に向け、三か年計画で研究することとした。その理由には、近年、分校に発達障害や心身症的な症状がある子どもたちの入院が見られるようになり、個々の特性に適切な対応をした授業づくりをする必要性が感じられるようになってきていたためである。

研究の初年度にあたる平成25年度は、文献や先行実践例から学び、在籍児童生徒への授業をより良くする方法を検討する予定であった。しかし、在籍する児童生徒については、精神科医師や臨床心理士を招いてのケース研究を行いながら、授業への示唆をいただくことができたが、在籍していた子どもが授業実践できないうちに転出したため、分析できる事例には至らなかった。そこで、年度途中からではあるが、「子どもたちのためにできること～いろいろな体験を通して～」というテーマを設定して、取組をまとめた。

二年目の平成26年度も発達障害があると診断された児童生徒で、長期に在籍した子どもがいなかったため、発達障害のある子どもを対象とした継続的な研究はできなかった。しかし、各教職員が一人ひとりの児童生徒の実態を考慮した授業づくりに励むことで、発達障害のある子どもが転入した場合でも、その子どもに応じた授業につながると考え、「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」に取り組んだ。

今年度は、中期目標の最終年度に当たるが、個々の児童生徒のニーズにあった授業を展開していくための支援方法について研究することで、発達障害のある児童生徒及びその傾向にある児童生徒を含めて、一人ひとりわかりやすく主体的に学べる授業づくりにつながると考え、自立活動を主とした類型Ⅱ型の生徒や、発達障害のある子どもを含む全ての児童生徒の実態に合わせたユニバーサルデザインの教材・教具の工夫や分かりやすい授業づくりに取り組むこととした。

## 2 本年度の取組

本年度のテーマ「一人ひとりの子どものニーズに応じた授業づくり」を研究するにあたっては、入院中である児童生徒の病状や心理を理解したより良い支援を目指すために、(1)「外部講師による研修」、(2)「周知会及びケース研」、(3)「支援会議」、(4)「研究授業」、の4つの柱で取り組んだ。

### (1) 外部講師による研修

#### ① 「感染予防研修会」 7月13日

高知大学医学部附属病院感染管理認定看護師 有瀬 和美 氏

#### ② 「話の聴き方について」 6月18日

心の教育アドバイザー 土方 美香 氏

- ③「食物アレルギー児への関わり方とアナフィラキシー時の対応の仕方」 7月27日  
高知大学医学部附属病院小児思春期医学教室 大石 拓 氏
- ④「児童虐待を防ぐために～DVD いやされない傷～」 9月17日  
心の教育アドバイザー 土方 美香 氏
- ⑤「南海トラフ地震に備えて」 9月25日  
南国市消防署予防課課長 久保 泰祐 氏
- ⑥「骨髄移植やハプロ移植について」 10月29日  
医療法人あけぼのの会あけぼのクリニック院長 石本 浩市 氏
- ⑦「思春期の子どもの心理及び子どもと保護者の心理的ケア」 11月19日  
高知工科大学教授 池 雅之氏
- ⑧「スマホ・インターネットの安全安心な使い方」 12月3日  
高知県南国警察署生活安全課スクールサポーター 上松 京子 氏
- ⑨「e-ネットキャラバン～インターネットの安心安全な使い方～」 1月15日  
NPO法人イー・エルダー専任講師 民本 博利 氏
- ⑩「ICT機器の研修」 6月5日、6月26日  
国立特別支援教育総合研究所 教育研修情報部総括研究員 金森 克浩 氏

## (2) 周知会及びケース研

年度当初及び児童生徒の転入時に周知会を開いき、全教職員で児童生徒の疾患や病状、性格及び普段の生活の様子、学習状況等について実態把握をしたうえで、支援にあたってのポイントを確認し、共通理解を図ってきた。また、必要に応じてケース研をもち、適切な支援の仕方についても全教職員で検討してきた。

今年度は、中学生に関して時間講師の教員も同席して周知会・ケース研を必要に応じてもつようにした。

## (3) 支援会議（平成28年2月1日現在）

年 度	月 日	支援会議の対象者
平成27年	8月 5日	Bさん
	8月10日	Aさん
	8月26日	Eさん
	9月 7日	Cさん
	10月30日	Aさん

	12月7日	Fさん
平成28年	1月13日	Dさん
	1月25日	Gさん
	1月28日	Aさん

#### (4) 研究授業

分校の教育課程は、小中学校に準じた「類型Ⅰ型」と、自立活動を主とした「類型Ⅱ型」の二つがある。

年度当初の計画では、「類型Ⅰ型」「類型Ⅱ型」ともに教員それぞれが複数回の研究授業を行い、ユニバーサルデザインを意識した授業を展開するためのニーズに応じた教材・教具の工夫、より良い手立て等について研究し、研究授業において検証していくことにしていた。研究の進め方としては、まず、学習指導案の検討を行い、第1回目の研究授業を実施する。次に、明らかになった課題を解決するために第2回目、3回目の研究授業を実施して課題解決ができたかどうか検証する。そして、研究授業を実施したことにより得た成果と課題を踏まえ、更に教材教具の工夫を行い、他の児童生徒の授業や指導に活かせるようにして行く予定であった。

しかし、今年度在籍した「類型Ⅰ型」の児童生徒は、長期に在籍していたものの治療や体調不良等の理由から病室での授業となる。病室では研究授業ができないため、同じ児童生徒に対して2回実施することができなかった。

そのような中で小学部の教員2名は、類型Ⅰ型の児童Bを対象に一学期に1回ずつ、Aを対象に二学期に1回ずつ、中学部の教員2名は、類型Ⅰ型の生徒Cを対象に二学期に1回ずつ、類型Ⅱ型の生徒Dを対象に一学期に1回、二学期に2回ずつの計3回、研究授業を実施した。

ここでは、日々の授業から見えてきた児童生徒への実態から、よりよい支援の方法を取り入れて研究授業を実施したときのポイントと研究協議内容を掲載することとした。

#### (5) 各学部の取組

##### ① 小学部の取組

研究授業は、小学部2年生の児童Bを対象に行った国語と算数について述べる。

##### (ア) 国語

【単元名】じゅんじょよく書こう（2／8時間）
【目的】 ・簡単な構成を考えて文章を書き、読み返して間違いに気づき、正すことができる。 ・心に残っている出来事について文章を書き、推敲する(言語活動)。
【児童の学習の様子】 Bは、マス目の中に字は書けるものの、偏と旁のバランスが悪いために十字リーダー入りのノートを使用するようにした。1マスの中が4つに分かれているため、偏や旁の位置を考えて書きやすくなり、整った文字が書けるようになった。また、間違えると慌てて消そうとするために、ノートや教科書がボロボロになることが多いため、左手を添え

るよう声掛けをしてきた。

**【支援方法】**

研究授業では、行にマス目をいれた大きさも三種類から選べるようにメモ用紙を用意し、児童が書きやすいように教材を工夫した。

**【研究協議の内容】**

- ・教科書に載っていた作文の題材に関するメモを児童が書きやすいように、行にマス目を入れていた。大きさも三種類の中から児童に選ばせたのは良かった。
- ・前時に書くと決めていた題材と違う題材を選んだために、児童の書きたい内容に予想が付きにくく、Bが書いた単語を適切に直すことが難しかった。(例：ドッグフード⇒ホットドック、スヌーディー⇒3D)
- ・参観授業であったために普段と違い、とても緊張していた。リラックスした雰囲気作りが不十分であった。

(イ) 算数

**【単元名】**「100より大きい数をしらべよう」～(1)数の表し方としくみ～(3/7)

**【目標】**

- ・1000までの数について、その意味や表し方を理解し、数の概念について理解を深めるとともに、数を用いる能力を伸ばす。

**【児童の学習の様子】**

Bは、文字の形を正しく捉えて書くこと、マスの中に収まるように書くこと、文字の大きさを揃えて書くこと等が苦手であり、また、書こうと思っている文字を書き間違ふことがある。間違いに気づいて消しゴムを使って消す時、鉛筆を持ったままで消そうとしたり、左手で紙を押さえずに消そうとしたりするため、紙がしわになる。また、きちんと消せていない事が多く、その上に書くため、読み取りにくい状態になりがちであるという問題があった。

**【支援方法】**

Bがノートに書く際に1マスに数字1字を書くことや、新しい問題に移る時1行あけて書くように指導した。教師が白板に問題文を書く際には、Bのノートのマス目の数を意識して1行に書く文字数を考え、板書とノートの折り返しが同じになるように配慮した。

**【研究協議の内容】**

- ・板書が分かりやすく、ノートテイクの指導が行き届いていた。問題文を集中してノートに写すことができていた。
- ・板書に目を向けさせ、板書を良く見るようにさせることは、前籍校に帰った時に必要な力である。そのためには、板書をよく見る癖をつけておくべきである。
- ・お金を使った指導は、生活に結びつく教材で良かったが、白板に児童に貼らせる活動を入れると、より良かったのではないか。
- ・文字の間違いがあるのは、形を正しく捉える力に弱さがあるのか、視力に問題はないのか、他の教科の時間でも形をとらえる力、視力、書写力等を確かめる必要がある。

- ・学習したことは、定着していく。間違っても訂正し、定着できるよう積み重ねていくことが大事である。
- ・できたことを褒めているところが良かった。
- ・児童が本当に理解できているのかどうか、常に確かめると良い。分かっているようで分かっていないところがあるかもしれない。

### (ウ) 今後の取組

国語、算数ともに、年度当初に予定していた児童A、Eへの複数回の研究授業を行うことができなかったものの、転入したBは、上記で述べたように、書字等に課題が見られたため、試行錯誤しながら手立てを工夫し、改善点を探ることができた。

授業における取組や効果の見られた手立てについては、退院時の支援会議において前籍校の担任に伝えた。前籍校の担任は、書字等の課題に関してあまり気づいていなかったが、あらためて考えたことにより、前籍校に戻った後も分校での手立てを引き継いで取り組むと言ってくれた。三学期になり、再びBが転入した。算数では、問題を書く時に1行あけて書いたり、国語では、「2行開けて書きましょう」等の教師の指示を聞いて、「ここからですね？」と教師に確認してから正しく書いたりする等ノートの書き方が改善され、分かりやすいノートになっていた。しかし、まだ、字形が崩れたり、文字がマス目からはみ出たり、間違いをきちんと消さないまま、次の字を書いて読みづらくなる等の様子が見られるため、指導の継続が必要である。

## ② 中学部の取組

### (ア) 類型I型

国語と英語は、中学部3年生の生徒Cを対象に行った研究授業について述べる。

#### 《国語》

【単元名】魯迅の小説「故郷」(1/7)
<b>【目 標】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作品を通して人間と社会との関わりについて考え、自分の意見をもつ。</li> <li>・情景や人物を描写する語句や表現に着目し、登場人物の心情や作者の意図を読み取る。</li> </ul>
<b>【生徒の学習の様子】</b> <p>Cは、学習に真面目に取り組むことができるが、日頃から自分の考えをまとめて書いたり、発表したりすることが苦手である。</p>
<b>【支援方法】</b> <p>「故郷」に書かれている内容を理解し、発表させるために時代背景に関心が持てるよう中国の年表や当時の家屋の写真を資料として提示した。</p>
<b>【研究協議の内容】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料として年表や当時の写真を見せたことは、良い手立てであった。写真に興味を持って見ていたので、もっとじっくり見せて気が付いたこと等を発表させたら良かったのではないか。</li> <li>・教師側から提示するばかりでなく、生徒がP C等で時代背景や当時の様子を調べる活</li> </ul>

動を取り入れても良かったのではないか。

- ・ 語句の意味調べを授業の中で行ったり、教員が教えたりせず、事前に宿題等で調べてこさせる習慣をつけるようにすることが必要ではないか。
- ・ 生徒が主体的に学習するようにしていくべきである。

## 《英語》

【単元名】「*Sushi-Go-Around in the World*」(4 / 7)

### 【目標】

- ・ 言語活動に積極的に参加し、相手とコミュニケーションをとろうとする。  
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ・ 言語材料を用いて、日本の文化を簡単に紹介することができる。(外国語表現の能力)
- ・ 内容を理解し、本文に関する英語の質問に答えることができる。(外国語理解の能力)
- ・ S(主語)+V(動詞)+O(目的語)+C(補語)の文と間接疑問文の用法を身に付け、運用している。(言語や文化についての知識・理解)

### 【生徒の学習の様子】

Cは、S(主語)・V(動詞)・O(目的語)の英語の語順が定着しておらず、並び替え問題で英文を組み立てる時、主語の次に目的語を持って来る等、日本語の語順で答えてしまうところがある。

### 【支援方法】

授業初めの英単語テストの実施や品詞を理解しやすくするための板書として主語：\_\_\_\_\_、述語(動詞)：\_\_\_\_\_、目的語：というようにアンダーライン等で強調しながら確認することとした。

### 【研究協議の内容】

- ・ 発音に自信がないと思われ、声も小さかった。もっと発音させる場面を増やし、きれいな発音ができているところは褒め、自信が持てるようにしてはどうか。
- ・ 自分の発音に自信がつくと学習意欲にも繋がると思われるので、発音記号についても触れ、アクセントの位置等が自分でも分かるように指導したら良いのではないか。
- ・ 教科書の内容を読み込んでいく際、品詞のアンダーライン等の表示が何であるか、白板に提示できていたことは、生徒に分かりやすい手立てであったと思う。
- ・ 前時の復習を教員が板書しながら行っていたが、プリント課題を生徒に渡す方法でもできるのではないか。授業時間の確保のために、時間をかけずに短時間で行うようにしてはどうか。
- ・ 授業の途中に「今日のポイント」を伝えていたが、授業の初めと終わりに伝えた方が良かったのではないか。

## (イ) 今後の取組

国語では、既習の漢字であるが漢字が読めないことが文章の理解力に影響しているとも考えられるため、漢字を読み書きできる力をつけるために、朝の会や授業の初めに、10問漢字テストを実施していきたい。Cは、決められたことを自分でこつこつと学習できる

ため、語句の意味調べも自主的にできるように指導したい。また、問いに対して単語で答えるのではなく、文章で答えることができるように、5W1H「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように」を入れた文で答える練習を授業や日常会話の中でも取り組んでいきたい。

英語でも、毎時間、単語テストを行うことで語彙力をつけること、各品詞を意識させ英文の文法構成を理解させることにより、自分でも英文が作れるようになること、発音分からない単語については、自分で調べたり、教員の発音を聞いたりしながら正しい発音ができるようになることを目指して指導していきたい。

### (ウ) 類型Ⅱ型

中学部には、自立活動を主とする教育課程：類型Ⅱ型の生徒Dが在籍しており、中学部の教員A・Bが3回ずつ研究授業を実施し授業改善を行ってきた。その研究授業の取組について、それぞれが述べる。

#### 《教員Aの授業》

第1回目	【単元名】「手紙を書こう」
	【目 標】・感謝の気持ちを込めて手紙が書ける。
	<p>【授業の様子】</p> <p>DがALTに伝えたいであろうと推察される気持ちを表す言葉を選択できるように、教員があらかじめレッツチャットに入力しておいたが、その中からDが言葉を選ぶことはなかった。取り組む気持ちになれなかったのは、選びたい言葉が選択肢の中になかったためなのか、それとも、レッツチャットを使いたくなかったためなのか、その場では判断することができず、ALTにレッツチャットを使って手紙を書くという計画から、徐々に、別の人に手紙を書く、別の人にメールを送るというように、気がつけば本来の目的から外れた活動に変わってしまっていた。</p>
<p>【研究協議の内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dがやる気にならなかったのは、ALTの来校前だったからではなかったのか。ALTの来校前に手紙を書くのではなく、授業をしてもらった後に書くほうが良かったのではないか。</li> <li>・レッツチャットで書くのが嫌であったなら、「手で書く？」と気持ちを聞いて確かめたうえで自書するようにしたら良かったのではないか。</li> <li>・レッツチャットに替わるものとして、あいうえお表の文字盤を提示する等、違う手段を講じることができていた。しかし、違う相手に「メールを送ろう」という授業展開になってしまい、本来の授業の目的から逸れてしまっていた。</li> </ul>	
第2回目	【単元名】「敬老の日のプレゼントをつくろう」
	【目 標】・楽しみながら制作活動に取り組む
	<p>【前回の研究授業を受けて工夫したこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dが興味関心を持って学習に取り組める内容として、制作活動を題材とした。</li> </ul>

	<p><b>【授業の様子】</b></p> <p>祖母に敬老の日のプレゼントとしてフェルトで電子辞書のケースを作る研究授業を行った。フェルトの生地の色は、iPadで検索した色見本を見て決めていたが、実際に提示したフェルト生地の色や、合わせる布地の色や柄が、Dの思い描いていた物とは違っていたようで、やる気につながらず、作りたいという気持ちにさせることが難しかった。色見本を提示してイメージに合う色を聞いたことは良かったが、iPadの色見本と同じ色のフェルト生地を準備できず、少し色味の違うフェルトを提示したことで、やる気になれなかったと思われる。最初から生地を提示して、選ばせるべきであった。フェルトと合わせる生地や飾りについても、実物を提示すれば、やる気を引き出すことができたかもしれない。改めてDは、渡す相手のことを考えて色の組み合わせやデザイン等を選んでいくことが分かった。</p> <p><b>【研究協議の内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フェルトの実物の色見本を提示して、選ぶようにしたら良かったのではないか。</li> <li>・色やデザインを選ぶことに重きを置いた活動にしたら良かったのではないか。</li> </ul>
第3回目	<p><b>【単元名】</b> イオンモール高知へ行こう</p> <p><b>【目 標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校外学習へ同行してくれた家族等へ感謝の気持ちのメッセージを考えることができる。</li> </ul> <p><b>【前回の授業を受けて工夫したこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dが相手のことを思って「考え、選ぶ」ことができるような授業展開に取り組んだ。</li> </ul> <p><b>【授業の様子】</b></p> <p>Dは、毎年1回の校外学習をとっても楽しみにしており、記録のDVDを見て楽しんでいる。昨年までは、教員が記録のDVDを編集していたが、今年度は、Dもコメントを入れるようにすることで、一緒に参加した保護者や看護師への感謝の気持ちを文字にして映像に入れようと計画した。校外学習の写真や動画を見せながら、Dの気持ちに合うコメントを選ぶことができるように選択肢を提示した。</p> <p><b>【研究協議の内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が経験してきたことが題材になっているため、興味・関心をもって意欲的に取り組むことができていた。</li> <li>・感謝の気持ちを伝えられるようにしたいのであれば、提示するコメントの最初に「ありがとう」を入れておき、「ありがとう」の後に続けるメッセージを考えるようにした方が良かったのではないか。</li> <li>・「ありがとう」ということばを人に伝えるために、Dが実際に「ありがとう」と瞬きしたことで周囲が喜んでいいるシーンを見せて確認することで、「ありがとう」の言葉の力に気がつくことができるようにしたら良かったのではないか。</li> </ul>



《教員Bの授業》

第 1 回 目	<p>【単元名】「ドリームナイト・アット・ザ・ズーの思い出」</p>
	<p>【目 標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・PPS スイッチを操作してP Cの画面をめくり、「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」を振り返る。</li> <li>・「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」で見たり、触ったり、抱いたりした動物の感触や触り心地を表すことばを知る。</li> </ul>
	<p>【授業の様子】</p> <p>Dは、幼い頃から動物が大好きで、図鑑やDVD等でいろいろな動物を見て楽しんでいる。近年、のいち動物公園の「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」に家族で行くようになっており、教員も同行して記録を録ってDVDにまとめ、Dが病室で見て楽しめるようにしている。今年度も中学部の教員2名が同行して写真や動画を写してきた。本時は、「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」に行ってきたばかりであるため、DVDにまとめる前にDが体験したことの写真を貼ったスライドを教材とすることで、意欲的にスイッチを押して見ることができると考えた。</p>
	<p>【研究協議の内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・写真を見ながら「ごわごわ」、「ふわふわ」、「ざらざら」などの表現がふさわしいか考えていたが、手で感触を味わうことができるように言葉に合った物を用意して触らせたなら良かった。</li> <li>・P Cの準備に時間がかかったので、Dを待たせてしまった。待たせないように事前にできる準備はしておくべきである。準備する間に、iPad で写真を見せる等、待たせている間の工夫が欲しかった。</li> <li>・P C画面が、Dの目線からどう見えているかを確認してから見せるということができていなかった。</li> </ul>
第 2 回 目	<p>【単元名】「10月のカレンダーを作ろう」</p>
	<p>【目 標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イオン高知ショッピングセンターで見たい物、買いたい物の画像を選ぶ。</li> <li>・PPS スイッチで電動はさみを操作し、画像を切り取る。</li> <li>・切り取った画像をカレンダーに貼る配置を考える。</li> <li>・自分の気持ちを視線や瞬きなどで表出する。</li> </ul>
	<p>【前回の授業を受けて工夫したこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dを待たせないために授業展開の段取りを良くするように計画する。</li> </ul> <p>(授業の様子)</p> <p>10月にイオン高知ショッピングセンターへ校外学習に行くことになっており、Dにとって10月は楽しみな月である。Dと10月のカレンダーの構想について考えた時は、ショッピングセンター内にあるアクセサリショップや菓子店等に行くことをとても楽しみにしており、それらの写真をカレンダーに貼って仕上げたいとの希望が出た。Dの希望の写真を準備したことで、好みの写真を選択できた。電動はさみで切る活動は、達成感のある活動のため、電動はさみにつないだスイッチを押</p>

	<p>し、取り組んでいた。</p> <p><b>【研究協議の内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パンフレットに興味を持っていたが、写真が小さく、画像が不鮮明であったので、iPad で大きく見せたら良かったのではないかな。</li> <li>・たとえば、ネックレスの写真では、3色すべてを貼るのではなく、一番好きな物を選択させて切り取り、カレンダーに貼るようにしたら良いのではないかな。</li> <li>・意欲的にスイッチを押して切っていたが、Dから切れているところが見えにくかった。切れているところや切った物を一つ一つ確認させることで、更に意欲につながると思われる。</li> <li>・切ったものをすぐに貼るのではなく、とりあえず仮止めしておいて、後でレイアウトを考えて貼るようにすれば、紙面がすっきりして良かったのではないかな。配置等については、Dに確かめながらすると良いのではないかな。</li> </ul>
第3回目	<p><b>【単元名】「来校者へのプレゼントを作ろう」</b></p> <p><b>【目 標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・来校者の写真を iPad で見て、イメージに合う千代紙等を選択する。</li> <li>・PPS スイッチで電動はさみを動かし、千代紙を切ったり、貼ったりする楽しさを味わう。</li> <li>・来校者へのプレゼント製作を通じて、相手のことを考えたり、感謝したりする気持ちを育てる。</li> </ul> <p><b>【前回の授業を受けて工夫したこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dが切った千代紙が見えるような教材配置をする。</li> </ul> <p><b>【授業の様子】</b></p> <p>来校するアロマセラピストへ感謝の気持ちを伝えるため、手作りのプレゼントを製作することとした。プレゼントを渡す相手のイメージに合わせて、千代紙の色や柄を選び、電動はさみを使って切ったり、のりで貼ったりして製作活動を行った。</p> <p><b>【研究協議の内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アロマとは、どういうことなのか、iPad で画像を見せただけであったので、どんなことをしに来てくれるのか等、何のためにプレゼントを作るのか、もっと詳しく説明してから作り始めるようにすれば、意欲につながるのではないかな。</li> <li>・千代紙の材質は、電動はさみでは切りにくかったと思われる。</li> <li>・切れている様子がDから見えていなかったなので、切れていく様子が見えるようにしていくことが意欲につながると思う。</li> <li>・切れた千代紙をDから見えるように掲示したことは、良かった。</li> <li>・電動バサミの準備に手間取り、Dを待たせていた。事前に準備をしておくべきである。</li> </ul>

### (エ) 今後の取組

研究授業を教員A・Bともに3回ずつ行い、授業改善を行ってきたつもりであるが、Dが興味を持って意欲的に取り組める題材を選び、教材を準備すること、授業が計画通りに

進まない時にDの気持ちを汲み取りながら、臨機応変に対応できる力、やる気につながる言葉かけや教材の提示の仕方等に改善する余地があることが分かった。そのためには、日頃からDの好きな物、興味を持つものを探り、Dが主体的に活動できる学習内容や授業展開を考えていかなければならないと痛感した。

### 3 成果と課題

#### (1) 外部講師による研修

##### ① 成果について

本校のこころの教育アドバイザーである土方美香氏と高知工科大学教授の池雅之氏から、話の聞き方や傾聴方法について教えてもらうことができた。お二人とも、話しを聞く時の心構えや注意点について具体的なポイントをとして『相手の話を聞く時は、自分の話は一切せず、相手の話を親身に聴くこと』、『耳を傾けることに徹し、頷いたり、相槌を打ったりしながら聴くことも大事であること』等を示してくれた。

感染予防研修には、本校兼務教員も来校して、分校教職員と一緒に参加ができたことは、新しい取組である。分校および兼務教員が一致団結して児童生徒の指導にあたる基盤となった。

南国警察署生活安全課スクールサポーターの上松京子氏及びe-ネットキャラバン専任講師の民本博利氏からは、インターネットやスマートフォンの安心安全な使い方について教えていただくことができた。最近では、ほとんどの中学生がスマホを持っており、インターネットやSNSを日常的に利用している。また、スマホを持っていない小学生にとっても保護者や知り合いのスマホを触る機会が多いため、児童生徒はもちろん保護者にとってもタイムリーな話題で良かった。

児童虐待を防ぐために毎年、研修を行っている。今年は、児童虐待による脳の損傷についてDVDを観ながら、心の教育アドバイザーの土方美香氏から適切なアドバイスをいただく研修を行った。虐待された記憶は、子どもの脳に刻まれて行くことが分かり、虐待を未然に防ぐことの重要性を感じた。

今年度も、昨年に引き続いて研修の講師を引き受けてくださった方々がおり、同じ講師を何度も招聘することで、講師が分校の実態に合わせた研修内容を考えてくれ、昨年度よりも進歩した研修につながった。

類型Ⅱ型の生徒の授業を充実させるために、今年度も国立特別支援教育総合研究所教育研修情報部総括研究員、金森克浩氏に6月に2回来校していただき、実際にTobiiを生徒Dに使わせていただくことができた。生徒Dは、意図的に視線をTobiiのアイコンに送っており、操作できる力があると証明していただくことができた。

##### ② 課題について

教職員の資質向上のためには、連年、講師を引き受けてくださっている方に今後も引き続き講師をお願いできるようなつながりを大事にしていくことはもちろん、新たな講師の開拓が必要である。そのためには、予算を確保すること、あらゆる人脈を利用した講師開拓すること、そして、研修で学んだことをいかに日々の実践に活かすかが課題である。

## (2) 周知会及びケース研

### ① 成果について

転入時の周知会や必要に応じてケース会を持つことで、児童生徒の実態を教職員全員が的確に把握した対応につながっていると考える。小学部1年生から在籍している中学部2年生の類型Ⅱ型のDについては、今年度も月1回以上のケース会を持ち、教職員全体で共通理解を図ることができた。

今年度は、中学、本校兼務教員も一緒に周知会およびケース研をもちたいと考えていたが、勤務の関係で分校の教職員と一堂に会して行うことはできなかった。しかし、年度途中から着任した中学部の時間講師とは周知会をもつことができ、生徒への対応の仕方についても考えることができた。また、教頭が本校に出向き、兼務教員を対象に生徒の指導について説明することができたため、本校と分校の教職員の共通理解を図ることができた。

### ② 課題について

特に思春期を迎える小学部高学年の児童から中学生にかけては、だれしも心身ともに揺動く時期である。それに加えて、病気の治療のために入院生活を送ることとなり、様々な制約や制限を受けることとなるため、学習意欲や態度に変化が見られることがある。登校を渋ったり、登校しても授業を受ける気持ちになれなかったり、落ち着かない様子が見られる児童生徒もいた。児童生徒の普段の言動等から小さな変化を見逃さず、少しでも気になる事があれば、その都度ケース研を開いて、色々な角度から子どもを見ていくことが大事であると痛感した。中学生への対応に関しては、学期に一度でも兼務教員と分校の教員で話し合いができるよう、来年度は、夏期または冬期休業中に1回、ケース研をもつようにしたい。

## (3) 支援会議

### ① 成果について

支援会議は、主として退院後に安心して安全な生活ができるよう生活基盤を整えるため、児童生徒の転出に向けて実施した。出席者は、主治医、担当看護師、スクールソーシャルワーカー、前籍校の担任、管理職、養護教諭等であるが、児童生徒の実態によっては、地域の支援員等にも出席してもらい、退院までに複数回の支援会議を持つこともあった。

このように、必要に応じて支援会議を持つことができたことは、成果と言える。

### ② 課題について

児童生徒を中心として関係者が集まることは、家庭の問題、交友関係の問題、本人の学力面の問題等、さまざまな問題が複雑に関係し合っていることが分かり、分校だけでは解決できない現実が明らかになることも多かった。

問題解決のためには、児童生徒をとりまく関係者と分校が連携して、問題解決の手立てを探って行かなければならない。現段階でも、児童生徒の転入時には、主治医から聞き取りを行い、また、医教連絡会を定期的にかけて医師や看護師等病棟の様子を聞く機会を設けている。

児童生徒の退院後の生活の保障のためには、今後も病棟はもちろん、前籍校とも連絡を

密に取り合い、お互いに情報交換をしながら連携を深めていく必要がある。

#### (4) 研究授業

##### ① 成果について

研究授業を実施することは、教職員一人ひとりの力量を高めるうえで不可欠なことである。本年度も研究授業に取り組んだことで、他の教職員の授業実践から、児童生徒の実態の捉え方、発問の仕方、効果的な教材づくりと提示の仕方等を学ぶことができた。

研究授業を行うにあたり学習指導案を書いたことで、あらためて単元の目標やねらい、単元構成と本時の学習との関連性、学年の他教科とのかかわり、他学年の各教科のいろいろな分野や学習内容との系統性についても考えてみることもできたことは良かった。

今年度は、中学部の教員2名が、類型Ⅱ型の生徒Dに対して3回ずつ研究授業を実施することができたことで、教員それぞれの課題が見つかり、Dにとって分かりやすい教材、見やすい提示の仕方、Dが主体的に取り組める授業とは等、今後取り組むべきことが明確となり、良かった。また、学習指導案には、本時の活動が学習指導要領の自立活動における指導内容とのかかわりを明確に書き示すことができたことも成果である。

##### ② 課題について

分校の授業は、個別で行うことが多いため、個々の教員がそれぞれの児童生徒に授業を実施しており、一同が介しての研究授業を設定及び実施することが難しいのが現状である。また、時間割を事前に振り替えて、全教職員が参観できるようにしても、児童生徒の急な増減や病状の変化で実施できないことや参観できないこともある。しかし、同じ児童生徒であっても他の教科の時間にどのような学び方をしているのか、また、授業者が変わることで子どもの学び方が変わるのかどうか等、客観的に見ることは、児童生徒一人ひとりのニーズに合った支援を行うためには必要なことである。研究授業を設定し授業改善に取り組むことで、発達障害やその傾向のある児童生徒を含むすべての子ども一人ひとりが、分かりやすくかつ主体的に学べる授業づくりにつながると考える。

そこで、来年度は、研究授業のもち方を変えていきたいと考える。たとえば、教授回診があり、授業を入れられない月曜日の5時間目（回診が終わっている時間帯）に設定し、全教職員が参観できるようにしたり、授業をビデオで撮影して当日参観できなかった教員も見ることができるようにしたりする。また、分校は、長期の休業中でも児童生徒は病院にいるため、長期休業中の勤務日に研究授業を設定したりすることで、研究授業をもつことができるのではないかと考えられるため、今後、検討していきたい。

#### 4 おわりに

今年度は、平成25年度から三年計画で「発達障害のある子どもの授業づくりと、そのための教材・教具の工夫を行う」ことに取り組んだ最終年度であった。平成25・26年度とも、発達障害があると診断されており、かつ長期に在籍した児童生徒はいなかった。平成27年度については、発達障害のある子どもが年度の後半に短期間の入院をしてきていたが、その子を中心として継続的な研究を実施できるまでには至らなかった。しかし、各教職員が一人ひとりの児童生徒の実態を考慮した授業づくりに励むことで、発達障害の

ある子どもが転入した場合でも、その子どもに応じた授業につながるという一貫した考えのもと昨年度に引き続き、年度当初から「一人ひとりのこどものニーズに応じた授業づくり」をテーマに掲げ、類型Ⅱ型の生徒や、発達障害のある子どもを含む全ての児童生徒の実態に合わせたユニバーサルデザインの教材・教具の工夫や分かりやすい授業づくりに取り組んできた。

研究授業に関しては、大学病院内に設置された病弱の特別支援学校であるという特性から、いつ、どのような実態の児童生徒が、何人転入し、いつまで在籍するのか予測ができないうえに、病状により病室から長期間出られないなど、学習はできたとしても病状面から座位をとれないような体調であることも多いため、研究授業を設定すること自体が困難であった。また、今年度は、ほとんどの児童生徒が病室での学習であったため、教員が病室に出向き、分校の教室での研究授業に参観できない状況であった。同じ児童生徒に対していくつかの教科で何度か研究授業を行い、客観的に見ることで授業改善に取り組むと構想を立てていたが、実現できなかった。

来年度からは、新たな中期目標「病院内の学校の役割」をかかげ、三か年計画で取り組んで行きたいと考えている。目標は変わるが、研究のあり方は今年度と同様に（１）「外部講師による研修」、（２）「周知会及びケース研」、（３）「支援会議」（４）「研究授業」、の４つの柱で取り組むこととしたい。今年度の取組の中で、病気のために入院治療中である児童生徒が主体的に活動できるようにするためには、自分の病状を正しく理解して、生活に見通しがもてることが大事であることを痛感した。「病状説明や服薬、生活規制等」は、主として主治医や担当看護師が病棟で行い、分校は、「児童生徒が病状を理解した生活」ができるように自立活動や学校生活全般で取り組んでいる。しかし、児童生徒によっては、正しい理解ができていないために、病状にふさわしくない行動をとったり、情緒が不安定になったりする様子が見られ、病棟と学校が今以上に連絡を取りながら一緒になって取り組む必要性を強く感じた。

そこで、平成２８年度は、児童生徒が病状理解をすすめるために学校がしなければならないこと、学校ができること等について研究し、病棟と学校の更なる連携が図れるようにしていきたい。